

2024.4.6

「日本神話」について

清水徹朗

1. 「神話」と何か

神話(Myth)とは、**宇宙、人間、動植物、文化の起源・創造**などの**自然・社会現象を超越的存在(神)**や**英雄**などに関連させて説く説話。神々についての物語。**日本語の「神話」は「Myth」の翻訳語(1890年代から使用)**

ギリシャ神話(「イリアス」「オデュッセイア」)、創世神話(「旧約聖書」)、
インド神話(「マハーバーラタ」、「ラーマーヤナ」)

昔話・説話・伝説との違い、アニミズム、自然崇拜

科学の発展によって**非合理、非科学的**であるとみなされた

← 神話学(ミュラー、レヴィ・ストロース、ユング等)、比較神話学の発展



2. 「日本神話」とは何か

「日本神話」とは「日本に伝わる神話」のこと

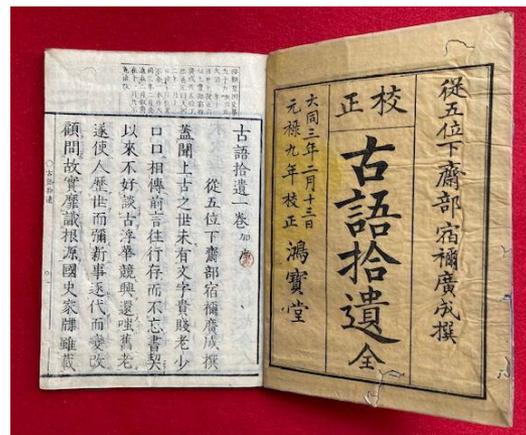
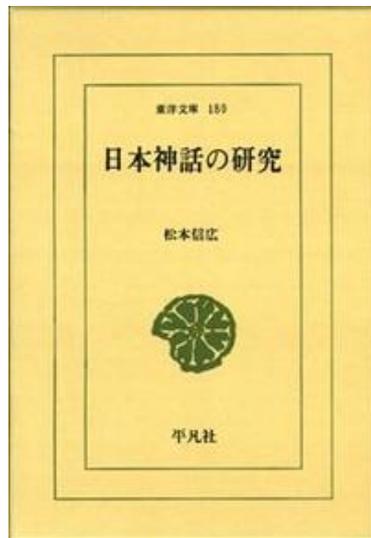
「**記紀神話**」……『古事記』『日本書紀』の神代編

……**8世紀に大和朝廷によって成書化された神話**

『風土記』……諸国の産物・地名等の伝承(播磨、常陸、出雲、肥前、豊後)
祝詞(のりと)、宣命(せんみょう)

『古語拾遺』(807)……齋部氏(忌部氏)の伝承を中心にまとめたもの

『先代旧事本紀』(9~10世紀初め)……物部氏の立場からまとめられた史書



天地開闢、国生み・神生み、天の岩戸、中つ国の平定、国譲り
天孫降臨、海幸・山幸、**出雲神話**

「一般には、『記・紀』の神代の物語を『記・紀』の神話と知っている。しかし考えてみると、これを神話とよんでよいかどうか問題がある。……『記・紀』の神代の物語は、神話を材料としながらもそれをいちじるしく書き改めている……その書き直しは**天皇の祖先の天照大神の地位を高め、天皇の日本支配を正当化することを中心の目的**にしている。」(直木考次郎『日本神話と古代国家』(1990))

「日本神話は**天皇国家の起源**を説明し、**天皇の統治権の神聖性**を立証する精神的支柱をなすという重要な機能を内在」(水野祐『日本神話を見直す』(1996))



3. 『古事記』の概要

現存する**日本最古の書物**

稗田阿礼が「帝紀」「旧辞」の内容を誦習したものを**太安万侶**が文字に書き表し、編集して712年に元明天皇に献上。

上中下の三巻(天地開闢から推古天皇まで)

『帝紀』……天皇を中心とした古代の伝承(天皇名、后妃、皇子、皇居、治世、陵墓)

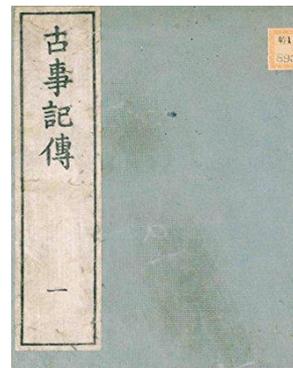
『旧辞』……宮廷内の物語、皇族や国の起源

上巻(かみつまき)……**「日本神話」**(天地開闢からイワレヒコ(神武天皇)の誕生まで)

中巻(なかつまき)……神武東征から応神天皇まで

下巻(しもつまき)……仁徳天皇から推古天皇まで

序文、偽書説、本居宣長



4. 『日本書紀』の概要

現存する**日本最古の正史**

681年に**天武天皇**が川島皇子以下12人に対して編纂を命ずる

天武天皇は自らの正当性・正統性を示す必要があった

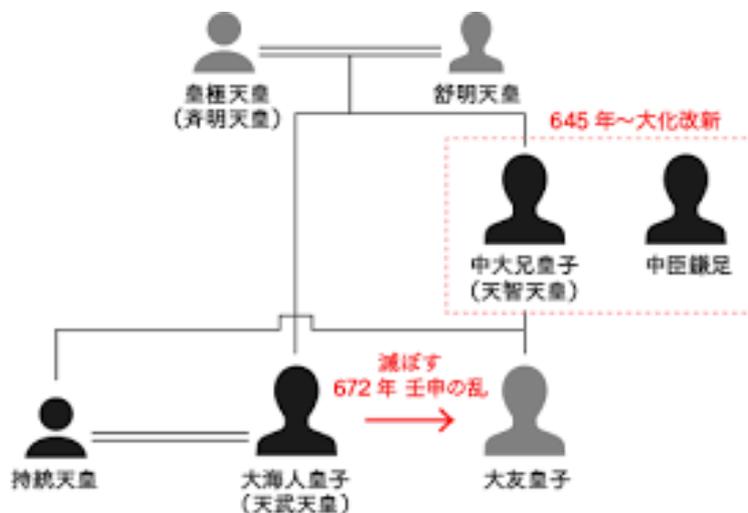
← 「壬申の乱」(672年)という王権篡奪(クーデター)を経て天皇になった

620年(推古朝)に『天皇記』『国記』を編纂 → 大化の改新(645年)で焼失

舒明天皇(在位629-641)の時代に天皇家と蘇我氏の対立

天武天皇は舒明天皇の子

古代律令国家を支える両輪……①**法の策定**(701年大宝律令)、②**史書の編纂**



720年に完成 …… 約40年かかる

編纂のリーダーは舎人親王(天武天皇第三皇子)であったが、**実際の責任者は藤原不比等**

帝紀、旧辞以外に、諸氏の記録、百済三書(『百済記』・『百済新撰』・『百済本記』)、漢籍、寺院縁起など多くの文献を参照

全30巻、系図1巻(系図は現存しない)

本文以外に**多くの異伝**(「一書に曰く」)を含む

神代上(巻第1) …… 天地開闢からスサノオまで

神代下(巻第2) …… 葦原中国の平定、天孫降臨から神武天皇誕生まで

古事記(推古まで)より長く持統天皇までの歴史

(舒明、皇極、考徳、斉明、天智、天武、持統を含む)

六国史(りっこくし、6つの正史) …… 「日本書紀」、「続日本紀」、「日本後紀」、「続日本後紀」、「日本文徳天皇実録」、「日本三代実録(清和・陽成・光孝)」

5. 『古事記』と『日本書紀』の相違

	古事記	日本書紀
編纂命令者	天武天皇	天武天皇
編纂者	稗田阿礼が語り伝え、太安万侶がまとめ奏上	川島皇子らが着手、舎人親王が奏上
成立	712年	720年
巻数	全3巻	全30巻
表記	日本語重視の変体漢文	漢文
収録年代	天地開闢から推古天皇	天地開闢か持統天皇
目的	天皇家の正当性を国内で誇示するため	海外、とくに中国王朝に対して自国の正史を伝えるため
典拠資料	天皇家の系譜や事績、神々や英雄の物語が描かれていたという「帝紀」「旧辞」	「帝紀」「旧辞」の他、中国・朝鮮史書、諸誌や地方の伝承、政府の記録など
内容	天皇家の歴史	律令国家の正史
特徴	神話時代に重点を置きながら、天皇家の歴史を語る。 日本語重視の文体。	初の正史。 異伝についての注記あり。

『古事記』と『日本書紀』は、内容、形式、文体において**違いが見られる**。

『古事記』は和風漢文で書かれ**物語性**が強い。また、「**神代**」が**全体の3分の1**を占め、『日本書紀』(181神)に比べ登場する神の数が多い(267神)。

また、出雲神話が『古事記』上巻の3分の1を占めるが、『日本書紀』では**出雲神話の扱いは小さく**省かれている部分も多くある(稲葉の白兔、タケミナカタ、サルタヒコ、イザナミの死)。

	古事記	日本書紀	
		正伝	一書
1	イザナキとイザナミ	△	○
2	アマテラスとスサノオ	○	○
3	出雲に降りたスサノオ	△	△
4	オオムナジ (白兔、八十神)	×	×
5	オオクニヌシの国作り	×	△
6	制圧されるオオクニヌシ	△	△
7	天孫降臨、日向三代	△	○

古事記に出てくる神話	日本書紀での有無		舞台
	正伝 (本文)	異伝 (一書)	
スサノヲとオホナムチ			
五穀の起源	×	▲	出雲神話
スサノヲのヲロチ退治	●	●	
スサノヲとクシナダヒメの結婚	●	▲	
スサノヲの神統譜	×	▲	
稲羽のシロウサギ	×	×	
八十の神によるオホナムチの試練	×	×	
オホナムチの根の堅州の国訪問	×	×	
オホナムチの葦原の中つ国の統一	×	×	
ヤチホコの女たち	正伝 (本文)	異伝 (一書)	出雲 (葦原の中つ国)
ヤチホコのヌナカワヒメ求婚	×	×	
スセリビメの嫉妬と大円団	×	×	
オホクニヌシの神統譜	×	×	
オホクニヌシとスクナビコナ	×	●	
依り来る神・御諸山に坐す神	×	●	
オホトシの神統譜	×	×	
国譲りするオホクニヌシ	正伝 (本文)	異伝 (一書)	国譲り神話
アマテラスの地上征服宣言	▲	▲	
アメノホヒの失敗	●	×	
アメノワカヒコの失敗	●	●	
アデシキタカヒコネの怒り	●	●	
タケミカツチの遠征	●	▲	
コトシロヌシの服従	▲	▲	
タケミナカタの州羽(諏訪)への逃走	×	×	
オホクニヌシの服属と誓い	▲	▲	
● = 古事記とほぼ一致 ▲ = 内容に違いはあるが対応 × = 対応する神話がない			

「日本書紀の神話記述は、**出雲神話を排除**したほうが律令国家の歴史を語るにはふさわしいという、きわめて**政治的な作為**がはたらいた結果である。」

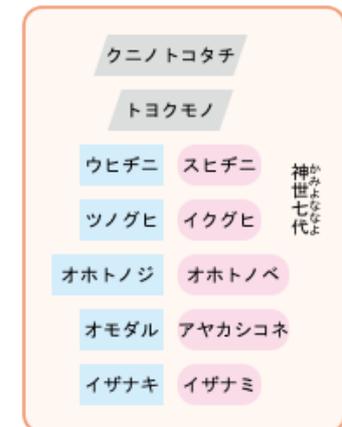
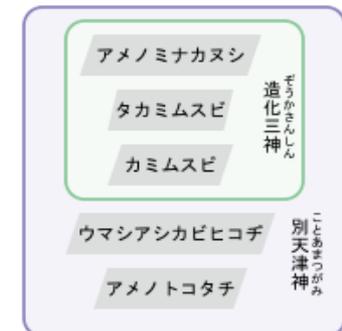
(三浦佑之『古事記の神々』(2020))

6. 日本神話の内容 (戸田民夫『日本神話』(2003)による、原典は『古事記』)

[1] 神々と日本国土の誕生

- ・混沌とした宇宙→陽と陰が分かれ天と地を形成(天地開闢)
- ・アメノミナカヌシ、タカミムスビ、カミムスビの誕生(造化三神)
- ・ウマシアシカビヒコジ、アメノトコタチの出現(別天神5神[ことあまつかみ])
- ・クニトコタチ、トヨクモノ、ウヒチニ、ツノグヒ、オオトノジ、オモダルの出現

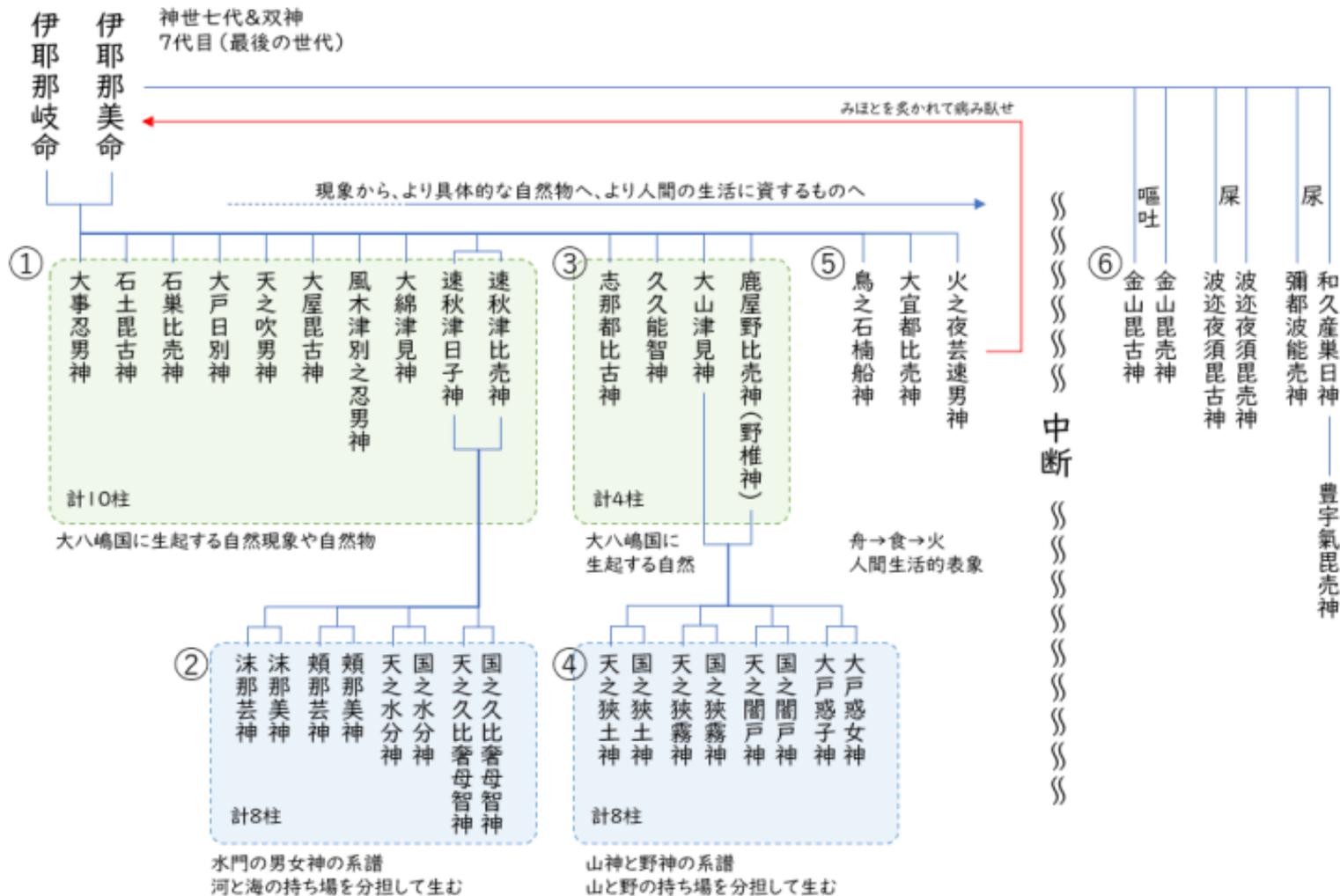
代	誕生した神		場	分類		単複	
1	天之御中主神		高天原	1	別天神	1	独神
2	高御産巢日神			2		2	
3	神産巢日神			3		3	
4	宇摩志阿斯訶備比古遲神		天	4	4		
5	天之常立神			5	5		
6	国之常立神			1	6		
7	豊雲野神			2	7		
8	宇比地邇神	妹 須比智邇神		3	神世七代	1	双神
9	角杵神	妹 活杵神	4	2			
10	意富斗能地神	妹 大斗乃辨	5	3			
11	於母陀流神	妹 阿夜上訶志古泥神	6	4			
12	伊邪那岐神	妹 伊邪那美神	7	5			



・神代七代の最後に現われたのが**イザナギ(男神)**と**イザナミ(女神)**

→ イザナギ、イザナミが国生み、神生みを行う(14島35神)

オノゴロ島、淡路島、大八島等、ヒルコ(不具の子)

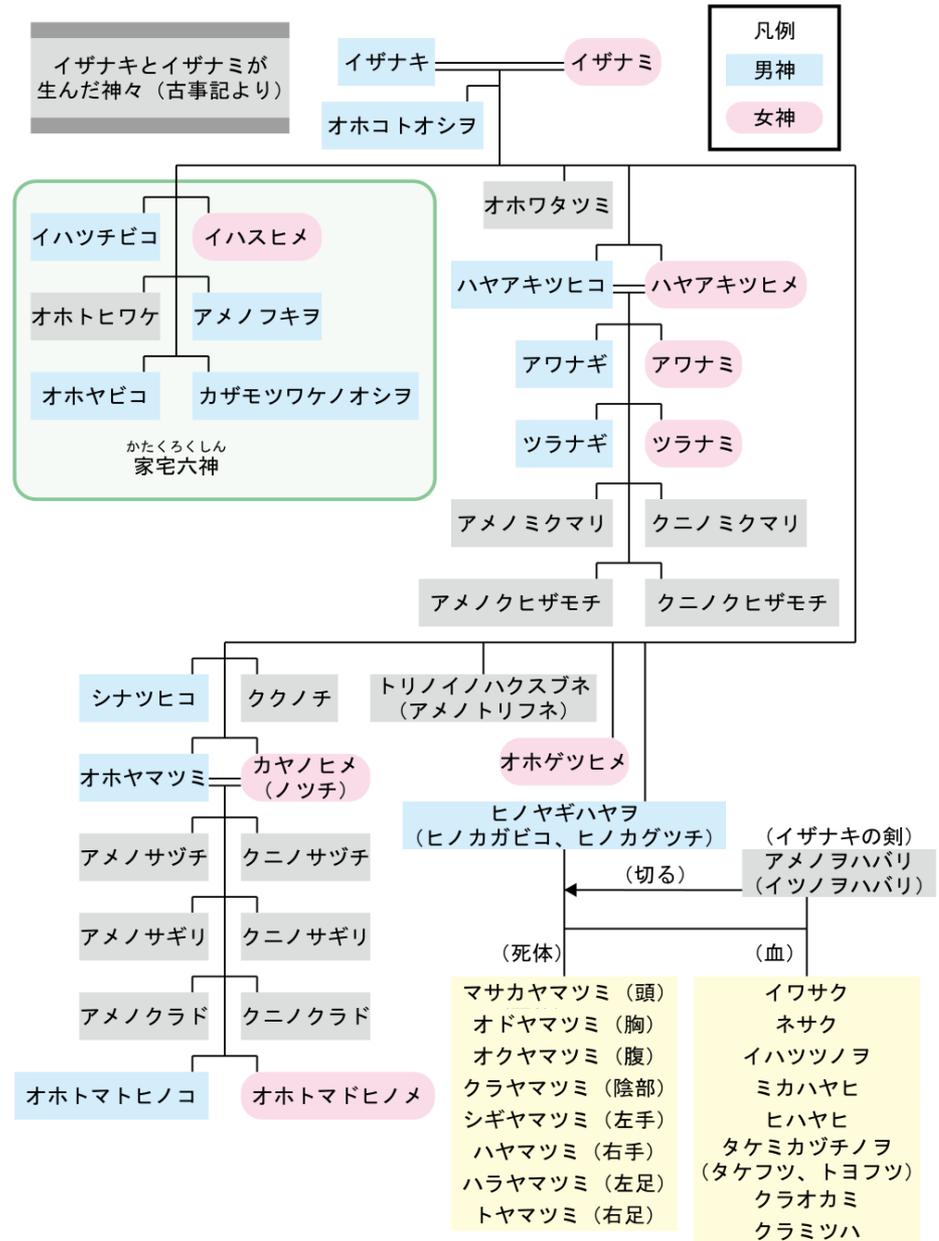


古事記		日本書紀						通説	
		本文	一書第一	一書第六	一書第七	一書第八	一書第九		
古事記の大八嶋	淡道之穂之狭別嶋 あわじのほのさわけのしま	淡路洲 あわじしま	淡路洲	淡路洲、淡洲	淡路洲	淡路洲	淡路洲	淡路島	
	伊豫之二名嶋 いよのふたなしま	伊豫二名洲 いよのふたなしま	伊豫二名洲	伊豫洲 いよのしま	伊豫二名洲	伊豫二名洲	伊豫二名洲	四国	
	隠伎之三子嶋 おきのみつごのしま	隠岐洲 おきのしま	隠岐三子洲 おきのみつごのしま	隠岐洲	隠岐洲	隠岐洲	隠岐洲	隠岐三子洲	隠岐島
	筑紫嶋 つくししま	筑紫洲 つくしのしま	筑紫洲	筑紫洲	筑紫洲	筑紫洲	筑紫洲	筑紫洲	九州
	伊岐嶋 いきのしま				言岐州 いきのしま			言岐島	
	津嶋 つしま				對馬洲 つしま			對馬	
	佐度嶋 さどのしま	佐度洲 さどのしま	佐度洲	佐度洲	佐度洲	佐度洲	佐度洲	佐度洲	佐渡島
	大倭豊秋津嶋 おおやまとよあきつしま	大日本豊秋津洲 おおやまとよあきつしま	大日本豊秋津洲	大日本豊秋津洲	大日本豊秋津洲	大日本豊秋津洲	大日本豊秋津洲	大日本豊秋津洲	本州
古事記の六嶋	吉備兒嶋 きびのこじま	吉備子洲 きびこのしま	吉備子洲	子州 こじま		吉備子洲	吉備子洲	児島半島	
	小豆嶋 あずきじま							小豆島	
	大嶋 おおしま							屋代島 (周防大島)	
	女嶋 ひめじま							姫島(大分県)	
	知訶嶋 ちかのしま							五島列島	
	兩兒嶋 ふたごのしま							男女群島 (五島列島)	
	古事記の大八嶋に ない州	越洲 こしのしま	越洲	越洲		—	越洲	—	
大洲 おおのしま		—	大洲		—	—	大洲		
—		—	—		—	磯取産島 おのごろしま	淡洲 あわのしま		

大八州記載比較表

は古事記の大八嶋に該当する州

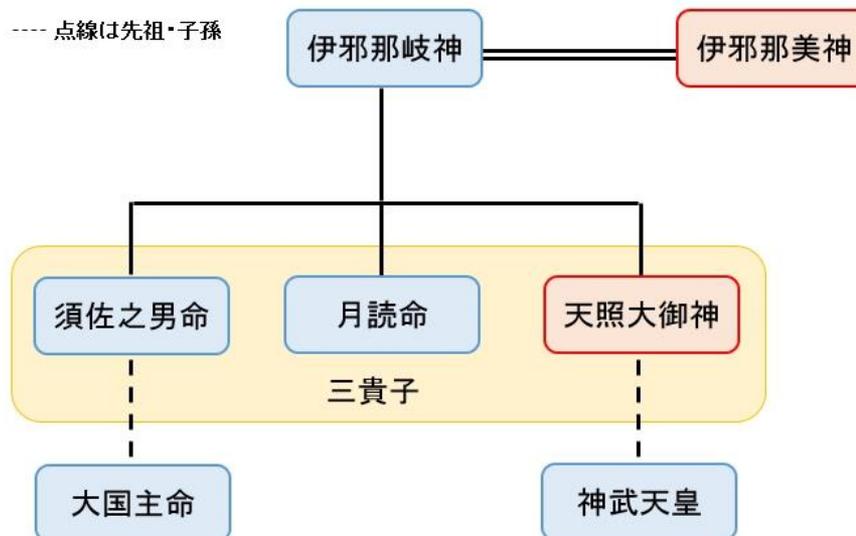
- **イザナミの死**(陰部[ホト]の火傷)
→ **黄泉(よみ)の国**へ
(出雲と伯耆の境に葬られる)
- **イザナミの胎内**から農産物の豊穰に関わる神が生まれる
- **イザナギの怒り**によって神々が生まれる
- イザナギが**イザナミの死体**を見る(腐敗、ウジ)



[2] 太陽神アマテラスの登場

- ・イザナギは九州の日向(ひむか)で禊(穢れを落とす)
- ・イザナギの持ち物、衣類から神々が生まれる
- ・**ワタツミ三神**(安曇の連の祖)、**ツツノオ三神**(住吉大社)
- ・アマテラス(左目)、ツクヨミ(右目)、スサノオ(鼻)が生まれる
……三貴神[みはしらのうずのみこと]

アマテラス……高天原の統治(日の神、太陽神)
ツクヨミ……夜の世界の統治(月の神)
スサノオ……海原の統治



- ・スサノオの反抗 → 高天原からの追放
- ・スサノオとアマテラスの争いと誓約(うけい)
- ・アマテラス(スサノオとの誓約)が3人の女神(宗像三女神)と5人の男神を生む
- ・アマテラスの玉から生まれた5人の男神の長子がアメノオシホミミ
- ・アメノオシホミミとタカミムスビの娘の間で生まれたのがニニギノミコト(天孫)
- ・他の男神は各地の国造の先祖となる
 - ……統治権の正当性を神話的に高めようとする意図
- ・スサノオの乱暴が続く(水田の破壊等)
 - アマテラスが天の岩戸に籠り、世界は暗黒の闇となる
- ・八百万の神々の相談
- ・アメノウズメ(芸能の女神)が裸になって踊る
 - アマテラスが岩戸を少し開けたところをアメノタジカラオが外に連れ出し、太陽の光が戻る
- ・スサノオが高天原を追放されて出雲に行く
- ・途中で会ったオオゲツヒメを殺し、その死体から様々な農産物が生じる

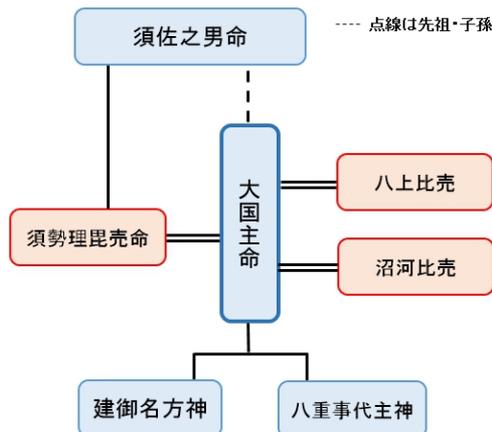
[3] 英雄神の闘争・冒険と愛

- ・出雲に行ったスサノオは肥川の上流でクシナダヒメに出会う
- ・ヤマトノオロチが暴れている話を聞き、退治することを決意
- ・ヤマタノオロチと戦って勝利
- ・切り裂いた尾から強靱な剣(草薙の剣)を発見。



・スサノオの6代目がオオクニヌシ

- ・オオムナチ(後のオオクニヌシ)には多数の兄弟(八十神)がいたが、オオムナチ(末弟)を仲間はずれにする
- ・稲羽の白兔の物語……オオムナチが皮をはがされた白兔を助ける
- ・オオムナチがヤガミヒメと結婚 ← 他の兄弟が迫害
- ・オオムナチは紀伊国に逃れる
- ・その後、根の国に行き、スセリビメ(スサノオの娘)と出会い結婚
- ・数々の試練を乗り越え出雲に戻ってきたオオムナチは地上の国の主となりオオクニヌシと呼ばれるようになった
- ・オオクニヌシは高志国のヌナカワヒメと結婚
- ・他にも多くの女性との間で181神を生む(「日本書紀」一書)



[4] 葦原の中つ国の主権争い

- ・アマテラスが**アメノオシホミミ**(長男)に**葦原の統治を命じる**
- ・アメノオシホミミは天の浮橋まで来て中つ国を眺め、その混沌状態(不穏、無秩序)を見て高天原に引き返した
- ・そこでアマテラスは**タカミムスビ**(高天原の司令塔)と協議し、二男の**アメノホヒ**を地上に派遣したが、アメノホヒはオオクニヌシに感心し中つ国にとどまった。
- ・次いで若いアメノワカヒコ(アメツクミタマの子)を送るが、オオクニヌシの娘シタテルヒメと結婚してしまい、高天原に戻ってこなかった。
- ・2回の失敗を踏まえ、オオクニヌシに圧力をかけるため**タケミカツチ**を中つ国に派遣し、国譲りの交渉を行った。
- ・**コシロヌシ**(オオクニヌシの子)は中つ国の統治権を天つ神に献上することをオオクニヌシに進言した。
- ・一方、**タケミナカタ**(オオクニヌシの子)は国譲りに反対し、**タケミカツチ**と力競べをするが、タケミナカタに敗北し、信濃国の諏訪まで逃げた。
- ・その結果、オオクニヌシは**中つ国の主権を譲渡**し引退した。

[5] 地上に降る神々

- ・タケミカヅチが高天原に帰った後、アマテラスとタカミムスビは長子アメノオシホミミに改めて中つ国の統治を命じたが、アメノオシホミミは代わりに息子の**ニニギ**(母は**タカミムスビの娘**)を天下りさせることを提言
- ・こうしてアマテラスの孫ニニギが降臨することとなった(**天孫降臨**)。
- ・その際、アマテラスはニニギに**三種の神器**(**鏡、剣、玉**)を授けた。
- ・ニニギは下界へ向かう途中(天の八衢)、**サルタヒコ**に出会い、サルタヒコが道案内することになった(サルタヒコの故郷は伊勢)。
- ・また、**アメノコヤネ**(中臣連の祖)や**アメノフトダマ**(忌部首の祖)なども同行。
- ・ニニギが降り立ったのは筑紫の日向の高千穂



	八咫の鏡 (やたのががみ)	八尺瓊勾玉 (やさかにのまがたま)	草薙の剣 (くさなぎのつるぎ)
			
本物	伊勢神宮内宮	皇居御所 剣璽の間	熱田神宮
形代	皇居賢所	-	皇居御所 剣璽の間

[6] 地上の王家誕生

- ・地上に降りたニニギは海辺で**コノハナサクヤヒメ**(オオヤマツミの娘)に出会い結婚
- ・しかし、姉の**イワナガヒメ**(醜い容姿)も一緒についてきたので、ニニギはイワナガヒメを追い返した。→ 天皇の寿命に限りがあることの原因
- ・コノハナサクヤヒメは一夜の契りで身ごもり、**ホデリ**(海幸彦)、**ホスセリ**、**ホオリ**(山幸彦)の3人の子を生んだ。

ニニギノミコト



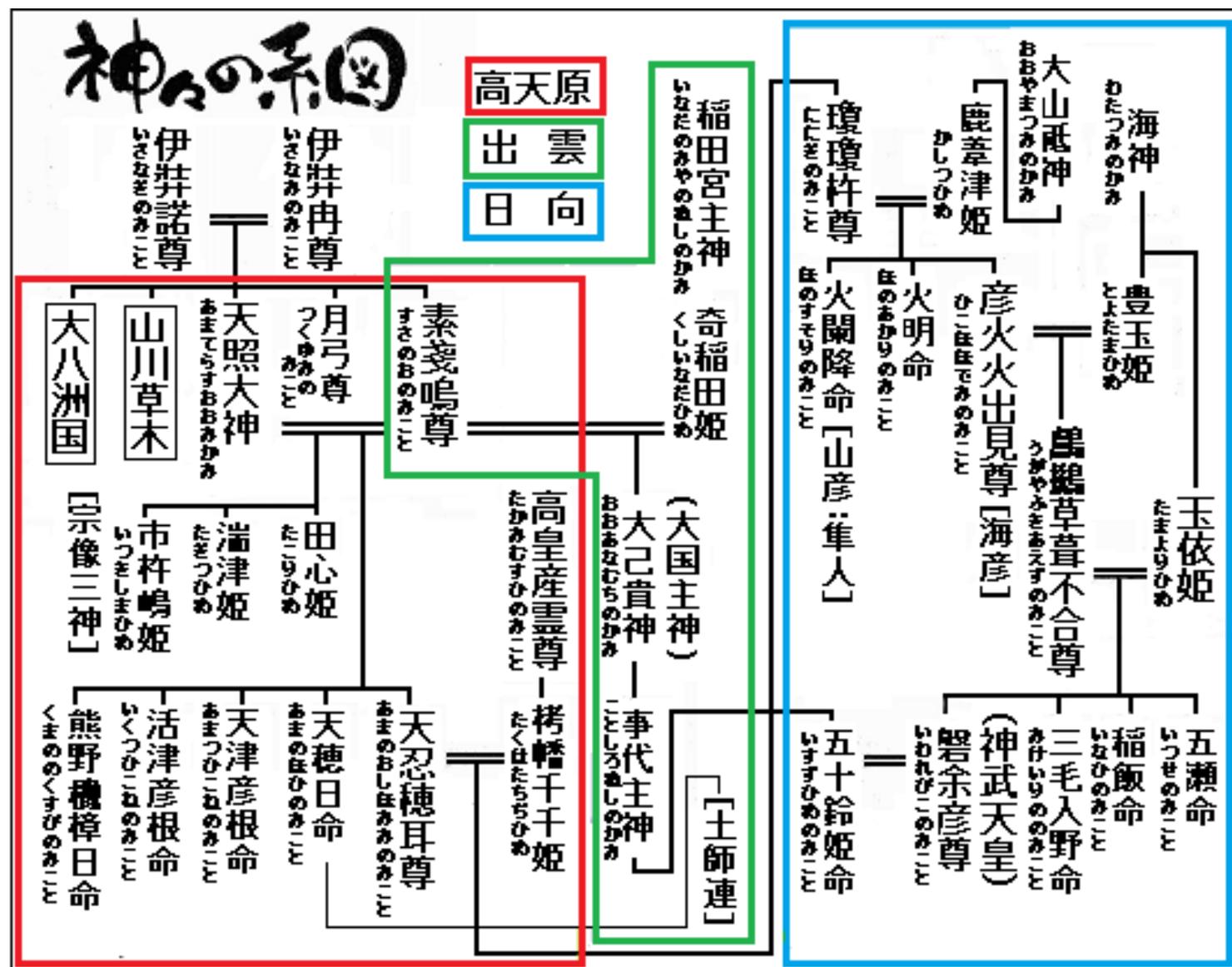
妹コノハナサクヤヒメ



姉イワナガヒメ



- ・**ホオリ(山幸彦)**は**ホデリ(海幸彦)**から釣道具を借りて釣りにでかけたが、釣針を魚に取られてしまい、ホデリから強く叱られた。
- ・ホオリは、知恵の神シシオチの助言により船で海に出て、ワタツミ(海の神)の住む宮殿に着く。そこで**海の神の娘トヨタマヒメ**と結婚。
- ・タイの喉に刺さった釣針を見つけ、3年ぶりに地上に帰る。
- ・その後、**ホオリ(山幸彦)**は**ホデリ(海幸彦)**と**対立**するが、**ホデリ**が降参してホオリを護衛する役目につく……ホデリの子孫が**隼人**
- ・トヨタマヒメはホオリの子を生むが、その出産の際、ホオリが産屋をのぞき見たため、トヨタマヒメは海宮に帰ってしまった。
- ・トヨタマヒメが産んだ子が**ウガヤフキアエズ**(神武天皇の父)
- ・トヨタマヒメの妹タマヨリヒメが養母としてウガヤフキアエズを育てたが、ウガヤフキアエズはその**タマヨリヒメ**と結婚し、**イツセ、イナヒ、ミケヌ、ワカミケヌの4人の息子**を生んだ。
- ・その末子ワカミヌケ(**カムヤマトイワレヒコ**)が東征し「**神武天皇**」になる



Z26. 『日本書紀』神代、神々の系図

[日向三代の陵墓]

ニニギ(霧島神宮の祭神) ・ ・ ・ ・ ・ 可愛山陵(鹿児島県薩摩川内市)

ホオリ(鹿児島神宮の祭神) ・ ・ ・ ・ ・ 高屋山上陵(鹿児島県霧島市)

ウガヤフキアエズ(鵜戸神宮の祭神) ・ ・ ・ ・ ・ 吾平山上陵(鹿児島県鹿屋市)



可愛山陵(えのさんりょう)



高屋山上陵(たかやさんりょう)



吾平山上陵(あいらさんりょう)

[森浩一の見解] (『日本神話の考古学』(1993)より)

- ・古代の**日向は南九州全体**(宮崎県だけではない)
- ・吾田(阿多)は薩摩半島(←かつて「吾田半島」と呼ばれていた)
- ・コノハナサクヤヒメは別名「神**吾田**津姫(カムアタツヒメ)」
- ・薩摩半島は東シナ海沿岸を利用した海上交通の中継地
- ・**阿多隼人**はゴホウラ貝やイモ貝を南島から北部九州に運ぶ役割を果たしていた
- ・「神話の展開のうえでは**南九州と天皇家**の遠い先祖が不離一体の関係にあった」
 - 実際の関係があったのか、「完全な創作」か？
 - ……「記・紀」の物語のような史実があったとは考えられないが、
「完全な創作」とみるには無視できない考古学的資料がある。」
- ・「三陵」は**明治政府**が1874年(明治7年)に「**政治決定**」したもの。
- ・前方後円墳は日向(西都原古墳群)と大隅半島に集中、薩摩には乏しい
 - ← 川内市で前方後円墳が発見される(1987年)
- ・応神天皇の妃に「日向泉長姫」がいる……「日向の泉(出水)の長島出身」
 - ← **古代天皇家と隼人のつながり**を示している

千田稔『王権の海』 (1998)

(歴史地理学者、元国際日本文化研究センター教授)

- ・大王家、倭(大和)国は**海人族**と**深い**か**かわり**がある
- ・韓国岳への八幡神の天降りの伝承(鹿児島神宮)
- ・吾田は薩摩国阿多郡の「阿多」に関連する地名
- ・海幸彦は隼人にあてて語られている
- ・海人たちを率いた**宗像氏**は**隼人**と同じ**種族**
- ・基層としての海洋民文化、海人族のネットワーク
- ・**オオヤマツミ**は**南九州の海人族の神**(宮本常一)



隼人舞



隼人の楯



8. 日本神話の起源

＜三層構造＞

A 縄文時代以来の固有のもの

B 航海民が持ち込んだ南方的要素

C 騎馬民族の文化の系譜を引く北方系の部分

① 騎馬民族的要素

- ・檀君神話と高天原
- ・天孫降臨(高句麗・百済の建国神話との共通性)
- ・三種の神器
- ・フェルトと真床御衾(まところおふすま)
- ・プリアート神話との類似(火の神の死)

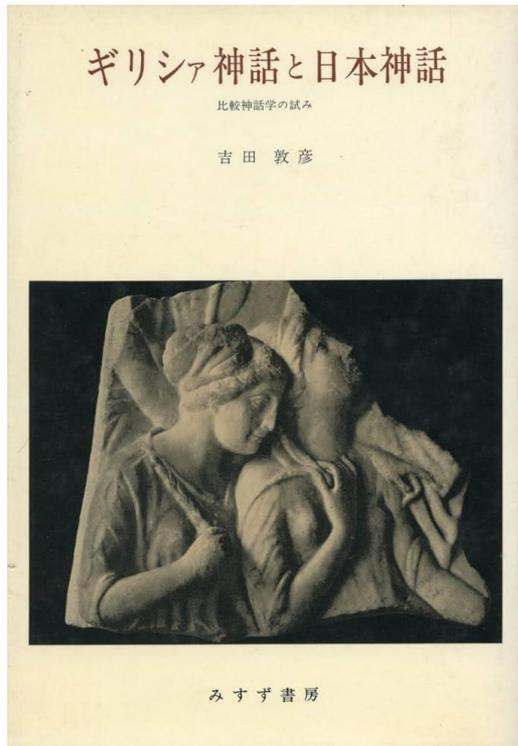
② 南方的要素

- ・稲羽の白兔
- ・竜蛇信仰
- ・江南の太陽神信仰の影響
- ・三貴子(太陽、月、海)
- ・失われた釣針
- ・水の精との結婚

③ ギリシャ神話との類似

- ・アメノウズメの踊り
- ・スサノオがヤマトノオロチを退治し妻を得る
- ・オオクニヌシと八十神の対立
- ・山幸彦と海神の娘の結婚

← ギリシャからスキタイ、高句麗を経て日本に伝わった



[日本神話の研究史]

- ・新井白石『古史通』(1716)……古代の神々を人として合理的・実証的に探究
高天原を常陸国に比定
- ・**本居宣長『古事記伝』**(1790-1822)…古事記の詳細な注釈、古事記を高く評価
- ・平田篤胤『古史成文』(1818)……宣長の研究を受け日本神話を独自に解釈
- ・山片蟠桃『夢の代』(1820)……日本神話を批判的に考察
- ・忌部正通『日本書紀口訣』(1367)
- ・吉田兼俱『日本書紀神代抄』(15世紀)
- ・久米邦武「神道ハ祭天の古俗」(1891) ← 国学者から非難され東京帝大教授を辞任
- ・高山樗牛「古事記神代巻の神話及び歴史」(1899)…神話部門と歴史部門を判定
- ・**津田左右吉『神代史の新しい研究』**(1913) ……古事記・日本書紀の史料批判
「記紀神話は天皇家の統治の由来を物語る政治的な創作物」
- ・**石川三四郎『古事記神話の新研究』**(1921)……世界史的視野から日本神話を
研究、月氏族(カチ族)、バビロン、ヒッタイトと日本民族の関係を考察
- ・高木敏雄『日本神話伝説の研究』(1925) …… 比較神話学

- ・松村武雄『神話学原論』(1940)
- ・三品彰英『日鮮神話伝説の研究』(1943)
- ・大林太良『日本神話の構造』(1961)
- ・鳥越憲三郎『出雲神話の形成』(1966)、『神々と天皇の間』(1970)
- ・直木考次郎『日本神話と古代国家』(1990) [1965-90年に書かれた論文集]
- ・上田正昭『日本神話』(1970)……岩波新書
- ・上山春平『神々の体系(正・続)』(1972、75)
- ・吉田敦彦『ギリシャ神話と日本神話』(1974)
- ・『講座 日本の神話(全11巻)』(1976-78)
- ・『日本神話研究(全3巻)』(1977)
- ・吾郷清彦・鹿島昇編『神道理論大系』(1984)
 ……神道、日本神話とユダヤ神話、インド神話の関係を考察
- ・森浩一『日本神話の考古学』(1993)
- ・神野志隆光『古事記と日本書紀―「天皇神話」の歴史』(1999)
- ・溝口睦子『アマテラスの誕生』(2009)
- ・三浦佑之『古事記の神々』(2020)
- ・田中英道『日本神話と同化ユダヤ人』(2020)

[津田左右吉] (1873－1961)



- 1873年 岐阜県で生まれる（津田家の先祖は尾張藩家臣）
- 1891年 東京専門学校（早稲田大学）を卒業し、中学校教員になる
- 1908年 満鉄調査室研究員
- 1918年 早稲田大学講師、20年より教授
- 1940年 著作が皇室尊厳を冒瀆しているとして起訴（出版法違反）、早大教授辞任
- 1949年 文化勲章受章

〔主著〕『神代史の新しい研究』（1913）、『古事記及び日本書紀の新研究』（1919）、
『文学に現われたる我が国民思想の研究（全4巻）』（1917－21）、『神代史の研究』（1924）

記紀の文献学的考証を行い、記紀神話から神武天皇、欠史八代から神功皇后までは史実ではなく、資料的価値は全くないと主張。

『古事記及び日本書紀の研究』（1940）

「**記紀の記載は批判を要する**。そういう批判を厳密に加えた上でなければ、記紀というものは歴史的研究の材料とすることはできない。」

「記紀の神代史及び上代の物語の目的は、主として**皇室の起源由来とその權威の発展の情勢**とを説くところにあった。」

戦後は象徴天皇制、皇室を擁護（『建国の事情と万世一系の思想』（1946））

「**国民的結合の中心**であり**国民的精神の生きた象徴**であられるところに、**皇室の存在意義**がある。」

「われらの天皇」はわれらが愛さねばならぬ。」

[直木孝次郎] (1919–2019)

兵庫県生まれ、京都大学史学科卒。1943～45年海軍に入隊。大阪市立大学、岡山大学教授。戦後の日本を代表する古代史研究者。『古代国家の成立』(1965)、『倭国の誕生』(1973)

『日本神話と古代国家』(1990)……1965～88年に書いた論考

「津田左右吉は「記紀」神話の研究を飛躍的におしすすめた」

「**徹底した神話批判**」「日本神話が古代天皇制の産物であることを論証」

「「記・紀」の神話には後世の造作による記事が多いという**津田の提起の正しさ**」

・「**津田学徒**」である私

・「記・紀」批判をよりいっそう推進する「**責任**」



『記・紀』の目的は「**天皇には日本を支配する正当な理由がある**」ことを示すこと

→ 『記・紀』の記事には厳密な批判が必要

「三世紀末ごろから大和地方の内外に権力を持つ豪族があらわれはじめ、四世紀中ごろ、それらを統合して大和朝廷が成立し、崇神天皇が初代の天皇となった。」

「天皇家の本拠地は三輪山の山麓地域」

「四世紀末から五世紀はじめにかけて、大きな政治的変動が起こり、大阪平野に強大な勢力を持つ豪族が起こって崇神王朝を圧倒し、これを支配下におさめるようになった。」

「応神天皇は入婿によって新しい王朝を形成した。」

「**神武天皇はまったく伝説上、物語上の人物**」「神武天皇の実体はなにもない」

「**神武東征の物語は、応神天皇の大和平定の史実をもとに作られた**」

「『記・紀』の神代の物語は比較的後代に天皇の立場から編集されたもので、古代の民衆に広く信じられた神話ではない」……山片蟠桃、安藤昌益が指摘していたこと

「天皇中心の「記紀神話」は大日本帝国憲法で確立した**明治天皇制の精神的支柱**」

「**「天皇陵」も偽造されたものが多い**」

〔上田正昭〕 (1927－2016)

兵庫県生まれ、京都大学史学科卒。京都大学教授、大阪女子大学学長。『日本古代国家成立史の研究』(1959)、『帰化人』(1965)、『日本神話』(1970)

『日本神話を考える』 (1991)

神話＝「書かれた神話」＋「書かれざる隠された神話」

「記紀」神話が日本神話のすべてではない、ハレの場における語り、語部

アマテラス＝オオヒルメムチ＝日神

ツキヨミ……渡来氏族、海人集団と関係が深い

三柱のワタツミノカミ(綿津見神)……住吉大神(住吉神社、住吉大社)

皇祖神の二元性……天照大神、高御産日神(タカミムスビノカミ)

日本民族は「複合民族」(嘉田貞吉)…先住土着民＋弥生系民族＋天孫民族

アマテラス神話(先住の米作農耕民族)とタカミムスビ神話(遊牧民文化をもつ侵入民族)は全く**別系統の神話圏**に属するもの(岡正男)

対馬にタカミムスビの古社が存在する⇐朝鮮半島からツングース系の民族が到来

アマテラス……「アマ」は「天」ではなく「海」である(＝新井白石の解釈)

アマテラス大神の海神的要素、在地(伊勢)の海人集団の太陽信仰

「天照大神の神話には道教の最高の仙女ともいべき西王母の信仰が重層していた」

〔上山春平〕(1921－2012)

和歌山県生まれ、京都大学哲学科卒。1943－45年海軍で回天特攻隊配属、京都大学教授。
『弁証法の系譜』(1963)、『大東亜戦争の遺産』(1969)、『埋もれた巨象』(1977)

『神々の体系』(1972)

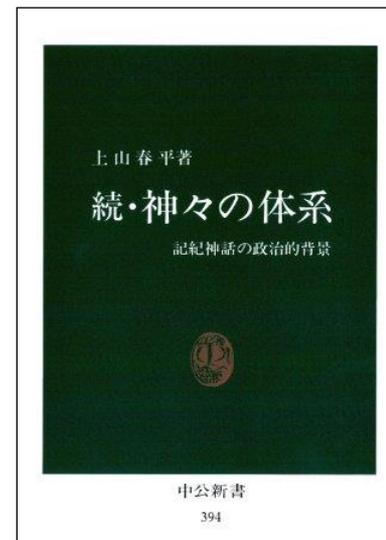
戦時中に「古事記」を読む(潜水艦の中)

津田左右吉の主張に共感……「神代史は皇室の権威の由来を説くために作られたもの」→ この説の当否を自分の眼で確かめる……記紀神統譜の研究

本居宣長の主張(「国学」、日本文化の土着思想)は受け入れられない

← 中国思想からの影響……「淮南子」「老子」

日本の古代国家形成過程における「**東アジア的背景**」……外来文化の吸収



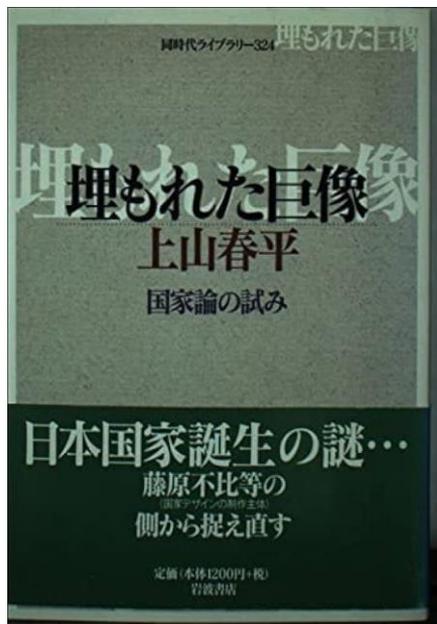
藤原不比等を中心とするグループが果たした役割……「藤原氏独裁体制」

「**記紀**」の歴史は「**天皇家のためというよりはむしろ藤原氏のため**」と見るべき。

「元明の仮面にかくれた不比等の実権」

「天皇家の権力は五世紀の「倭の五王」時代に頂点に達し、以後しだいに弱体化の過程をたどり、大化の改新によって再び強大化されたように見えるが、それは外見だけのことであり、実際には、**理念的に高められた天皇家の権威**が新興の**藤原家の実権** **掌握の手段として利用された**に過ぎなかった。」

「藤原氏の前身たる中臣氏は、大化改新以前において、少なくとも天皇の代行として国政の中枢に参与できるような家柄ではなかった。」



【大林太良】(1929－2001)

東京都生まれ、東京大学経済学部卒、ウィーン大学で民族学を学ぶ。東京大学教授。『日本神話の起源』(1961)、『稲作の神話』(1973)、『邪馬台国』(1977)

『神話の系譜』(1991)……1971～86年に書かれた論考

イザナギ神話(死体の各部位から神々が生まれる[死体化生])

……中国(華南)の盤古神話に由来、世界各地に同様の神話がある

異常出産 → ミソギ、ウケイ……中国、ヒッタイトにある

海幸・山幸……インドネシア、ミクロネシア、江南の神話

天岩屋神話……高句麗の神話

天孫神話……新羅、モンゴルの神話

宇気比神話……日本神話における印欧神話的要素、北イラン牧畜民がギリシャ文化の影響を受けてのち、アルタイ牧畜民文化に入り、それが支配者文化の一部として日本に入った

死体化生の栽培植物起源神話(オオゲツヒメ)……インドネシア、メラネシアに分布

ギリシャ神話との関係

